

千葉県八千代市

麦丸宮前上遺跡 f 地点発掘調査報告書

-宅地造成に伴う埋蔵文化財調査-

2020

日新住宅販売株式会社
八千代市教育委員会
株式会社地域文化財研究所

千葉県八千代市

麦丸宮前上遺跡 f 地点発掘調査報告書

-宅地造成に伴う埋蔵文化財調査-

2020

日新住宅販売株式会社
八千代市教育委員会
株式会社地域文化財研究所

例　　言

1. 本書は、宅地造成に伴い埋蔵文化財の発掘調査が実施された、麦丸宮前上遺跡 f 地点の発掘調査報告書である。

2. 調査は、日新住宅販売株式会社より委託を受けた株式会社地域文化財研究所が、八千代市教育委員会の指導の下に行なった。

3. 遺跡の所在地及び、面積、調査期間、担当者などの調査体制は下記の通りである。

所 在 地 千葉県八千代市麦丸字宮前 1398-3 外

面 積 490.96m²

調 査 期 間 令和元（2019）年 9 月 2 日～同年 10 月 4 日

調査担当者 高野浩之

調査参加者 泉祐司 今野秀樹 岩佐亮治 表 豊 斎藤 慶 高橋千恵

田中成光 千葉由美子 古里兼吉 横勝雄 深山恒夫

整理参加者 川村理華 木村春代 小林真千子 野村浩史 増田香理

4. 整理作業及び本書の作成は、株式会社地域文化財研究所において高野が担当した。

5. 執筆分担は、第 1 章第 1 節が宮澤久史（八千代市教育委員会）、第 1 章第 2 ～ 4 節・第 2 ・ 3 章が高野である。また、縄文土器は斎藤弘道氏にご教示いただいた。

6. 調査記録及び出土品は、一括して八千代市教育委員会が保管・管理している。

7. 調査においては下記の方々にご指導、ご協力を賜った（順不同・敬称略）

日新住宅販売株式会社 株式会社エスティホーム 日新ホーム株式会社

八千代市教育委員会文化・スポーツ課文化財班 菅佐原滋之 鈴木 薫 堀江卓也

千葉源治郎 斎藤弘道

凡　　例

1. 遺構図は、国家標準直角座標系（世界測地系）を基準に作成し、方位は座標北を示す。

2. 遺跡名の略号は「1 5 3 f」である。また、遺構等は以下の略号を用いた。

堅穴建物跡：SI 土坑：SK 遺構内柱穴：P ピット：Pit 溝跡：SD 撥乱・植栽痕：K

3. 使用した地図類は、第 1 図が国土地理院発行 1/25,000 地形図「習志野」を、第 3 図が 1/20,000 「明治 15 年測量 白井橋本村」を、第 4 図が国土地理院発行 1/50,000 地形図「佐倉」を、第 5 図が 1/2,500 「八千代市都市図」を使用し、加筆した。

4. 遺構の規模は上端で計測した。深さは検出面から測るが、遺構内のピットは床面又は底面から計測したものである。主軸方向は長軸線を基軸に座標北から東西に何度傾いているかを示している。

5. 遺構図における土層説明では、「ゅ」が粒の径を表し、規模をミリ単位とした。微・少・中・多量は土層内における含有物の量を 4 区分したものであり、微量は 2 % 以下、少量は 3 ～ 9 %、中量は 10 ～ 19 % 程度、多量は 20 % 以上で含有量を（ ）に示した。色調は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。

6. 出土遺物は、50% 以上残存するものを個体、それ以外を破片とした。接合したものは 1 点と数えているが、同一個体であっても接合が適わなかつたものはそれぞれを 1 点としている。

7. 遺構図中に用いた網掛けの内容は、第 7 図の凡例に準じており、それ以外は図中に示した。

8. 引用・参考文献は、本文中の最後に一括して掲載した。

目 次 本文目次

例 言・凡 例・目 次

第1章 調査経過と遺跡の立地環境

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査方法と調査経過	2
第3節 遺跡の位置と環境	3
第4節 麦丸宮前上遺跡における既往の調査	6

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 調査の概要	7
第2節 縄文時代・弥生時代	9
第3節 古墳時代	13
第4節 中・近世	18

第3章 まとめ

写真図版・報告書抄録

挿 図・表 目 次

第1図 遺跡の位置と確認調査トレンド配置図	1	第12図 遺構外出土遺物	12
第2図 調査区域図	2	第13図 S I O 1	13
第3図 周辺旧地形図と遺跡の位置	3	第14図 S I O 2	14
第4図 周辺道路分布図	5	第15図 S I O 2 遺物出土分布図	15
第5図 調査範囲及び既往の調査地点	6	第16図 S I O 2 出土遺物	16
第6図 2区土層断面図	7	第17図 S K 1 0	17
第7図 調査区全体図	8	第18図 S K 0 6 · 0 9 · 1 1 ~ 1 6	18
第8図 S K 0 1	9	第19図 P i t 0 2 ~ 0 7 · 0 9	20
第9図 S K 0 2 ~ 0 5 · 0 7 · 0 8	10	第20図 S D 0 1	21
第10図 P i t 0 1 · 0 8 · 1 0 ~ 1 3	11	第21図 S I O 2 遺物分布断面図	22
第11図 遺構外出土遺物分布図	12		

第1表 麦丸宮前上遺跡調査一覧表	6	第5表 S I O 1 出土遺物集計表	13
第2表 縄文時代ピット一覧表	11	第6表 S I O 2 出土遺物集計表	17
第3表 縄文土器・弥生土器集計表	12	第7表 S I O 2 出土遺物観察表	17
第4表 遺構外出土遺物観察表	12	第8表 中・近世ピット一覧表	20

写 真 図 版 目 次

図版1 1区全景 / 2区全景

図版2 3区全景 / 4区全景

図版3 SK01全景 / SK01土層断面 / SK07全景 / SK08全景 / SI01全景 / SI01土層断面 /
SI01遺物出土状況 / SI01掘り方、壁柱列

図版4 SI02全景 / SI02近景 / SI02完掘全景 / SI02土層断面 / SI02上層遺物出土全景 /
SI02上層遺物出土近景 / SI02下層遺物出土近景

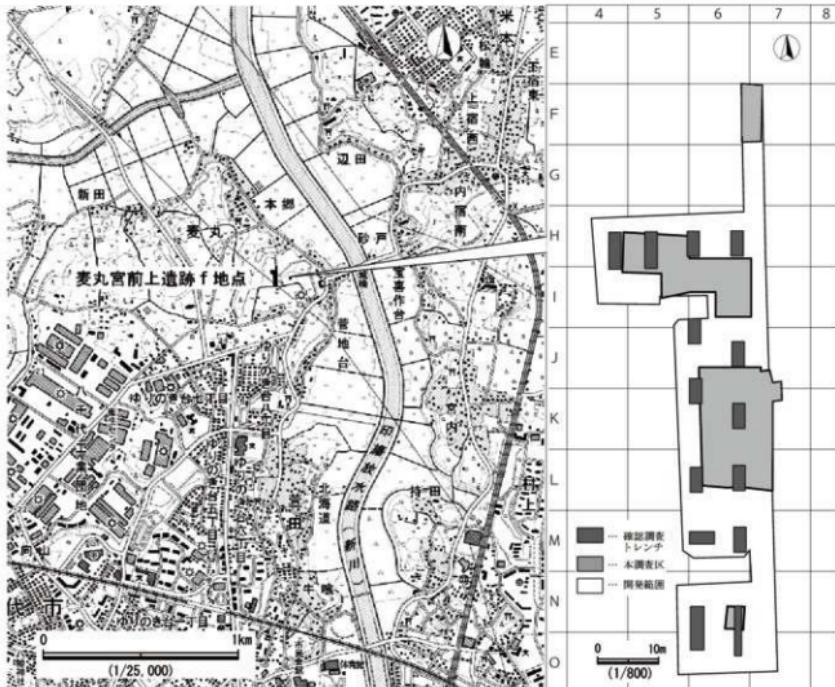
図版5 SI02焼土・炭化材検出全景 / SI02床上遺物出土近景 / SK11全景 / SK16全景 / SD01全景 / SD01近景 /
SD01 C ~ C' 土層断面 / SD01 D ~ D' 土層断面

図版6 遺構外出土遺物、SI02出土遺物

第1章 調査経過と遺跡の立地環境

第1節 調査に至る経緯

平成30年12月6日、日新住宅販売株式会社代表取締役 香佐原滋之氏（以下、事業者）から「埋蔵文化財の取り扱いについて（確認）」の文書が八千代市教育委員会（以下、市教委）に提供された。市教委は現地踏査を行い、開発面積9,782.62m²の内、950m²が周知の埋蔵文化財包蔵地（麦丸宮前上遺跡）に含まれると判断し、12月10日、その旨を事業者に回答した。回答後、事業者と協議を行い、遺跡の範囲、性格等を明らかにするための確認調査を実施するに至った。平成31年1月13日、事業者から文化財保護法93条の届出が提出され、市教委は準備が整った平成31年3月11日に確認調査を開始した。調査は、3月18日まで行い、縄文時代の土坑、古墳時代の竪穴建物跡等を検出し、協議範囲は490.96m²となった。この結果を受け、市教委と事業者で協議が行われ、記録保存（発掘調査）の措置をとることになった。調査の実施については、民間調査機関による実施を合意した。市教委は、事業者の意向により株式会社地域文化財研究所から調査計画書・積算書の提出を求め、適正な調査実施が可能と判断し株式会社地域文化財研究所を選定した。令和元年8月2日、事業者、株式会社地域文化財研究所、市教委との間で発掘調査の実施に関する協定書を締結し、同日、株式会社地域文化財研究所から市教委に文化財保護法92条の届出が提出され、本調査実施に至った。

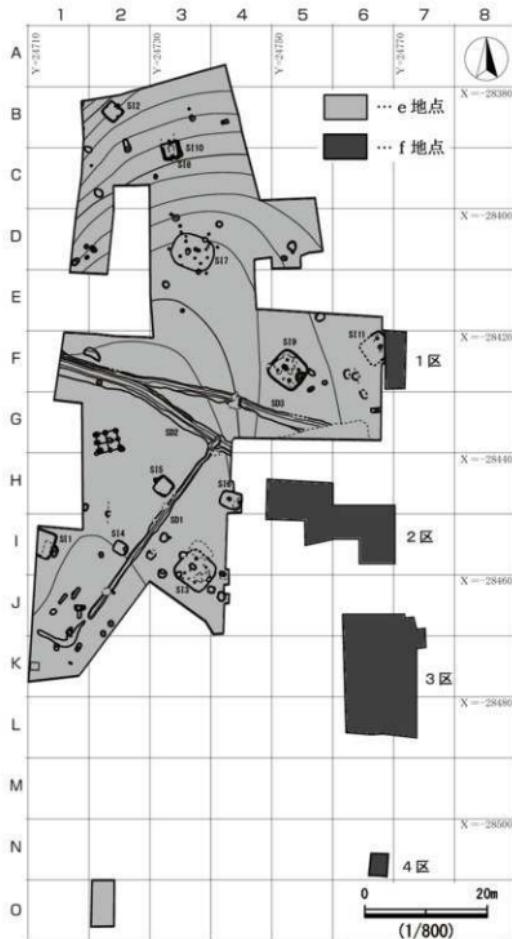


第1図 遺跡の位置と確認調査トレンチ配置図

第2節 調査方法と調査経過

f 地点では、事前に行われた確認調査の成果（第1図）により1～4区の本調査区域が設定された。基準点は、国家標準直角座標系（世界測地系）に基づき測量を行い、調査区に10m×10mのグリッドを網羅した。グリッドの名称は、隣接して既に調査が行われたe地点から連続する遺構があることを考慮し、e地点のグリッド名をそのまま踏襲した（第2図）。遺構の実測は、平面図、断面図とともに縮尺1/20を基本とし、炉は縮尺1/10で測った。遺構から出土した遺物の取り上げは、位置を可能な限り3次元で記録した。写真は、35mm判カラーリバーサルフィルム機と1000万画素以上のデジタルカメラを併用し、調査の過程で随時撮影した。

発掘調査は、9月2日より表土除去から着手した。表土除去は1区から行い、3～6日にかけて2～3区、10日に4区を終了した。表土除去中の4日から1・2区の遺構確認を開始し、翌5日から、両区の遺構掘削に入った。1区に所在するSI01は、掘り下げと記録作業を交互に繰り返しながら進めた。一方、2区のSD01は検出面から予想以上に深さを有していたため、3ヶ所の土層観察用ベルトを設定し、6日から翌週13日の午前中にかけ、作業員を集中的に投入して掘削を行った。13日の午後より3区の遺構確認、17日には4区の遺構確認を終え、17日以降はSI02及び各土坑を中心とした掘削に移行していく。20日には、記録を終えたSD01土層観察用ベルトの除去を行った。24日、SI01の掘り方調査とともに1区の土坑群及び3区の土坑群の掘削に入った。併せて4区土坑の掘削を行い、陥し穴であることが判明した。25・26日は3区SI02の調査を中心に作業を進めた。27日に各調査区の清掃を行って全体写真を撮影した。埋め戻しは10月4日までに行い、発掘調査を終了した。



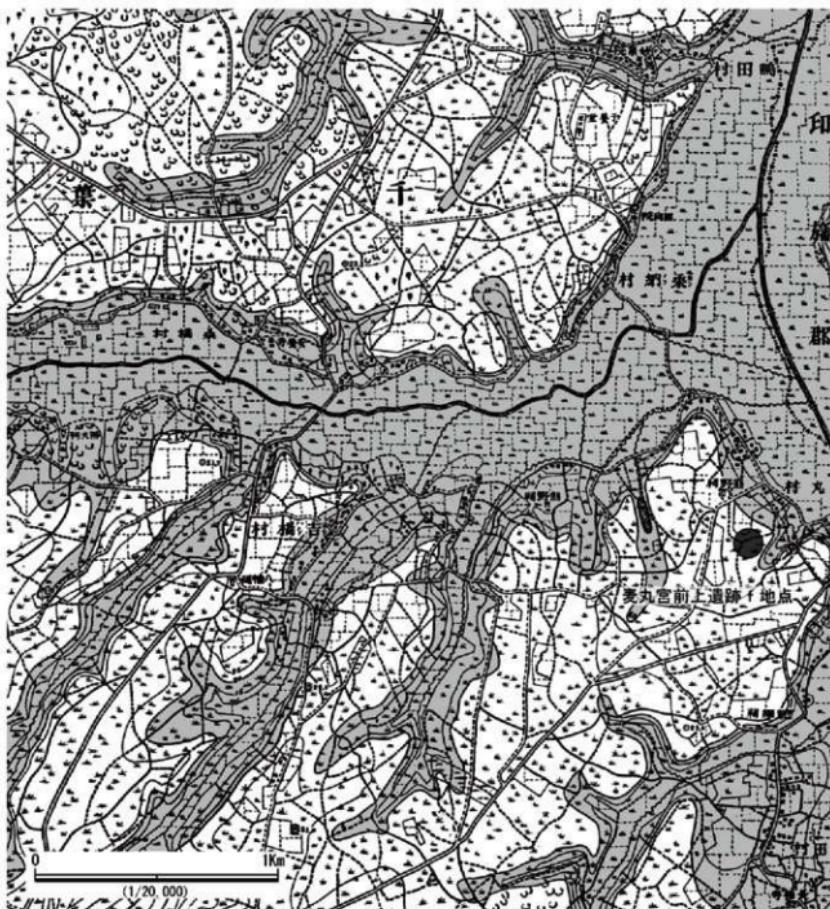
第2図 調査区域図

第3節 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

麥丸宮前上遺跡の所在する八千代市は、下総台地の北西部に位置している。台地全体の標高は20～30m程で、ほぼ平坦な地形が広がり、八千代市域の標高は概ね24m前後となっている。市域には、南流する新川やその支流で東西を横切る桑納川などによって台地が三方に大きく分断されている。その縁辺部では開析が進み、樹脂状の複雑な地形が形成される要因となっている。

本遺跡が立地する台地周辺には、南東側に須久茂谷津、北西側に花輪谷津が深く浸食し、さらに小規模な支谷が遺跡範囲の北端を取り囲むように入り込んでいる。本地点の現況は標高22mを測る平坦地であるが、調査区東側には北東方向から谷が迫った場所に立地しており、旧地形図（第3図）を見ても、付近に小支谷が入り込んでいることがうかがわれる。



第3図 周辺旧地形図と遺跡の位置

(2) 歴史的環境

前述したように、八千代市の台地縁辺部は小河川、小支谷によって複雑な地形を呈しているが、それでも市域全体は概ね平坦な地形が形成されており、生活の場としては適していたことが容易に想像できる。そのため多くの遺跡が周知され、旧石器時代から連続と活発な土地利用が行われてきたことが看取されるが、ここでは本地点で検出された時期及び遺構に絞って関連する遺跡を概観したい。

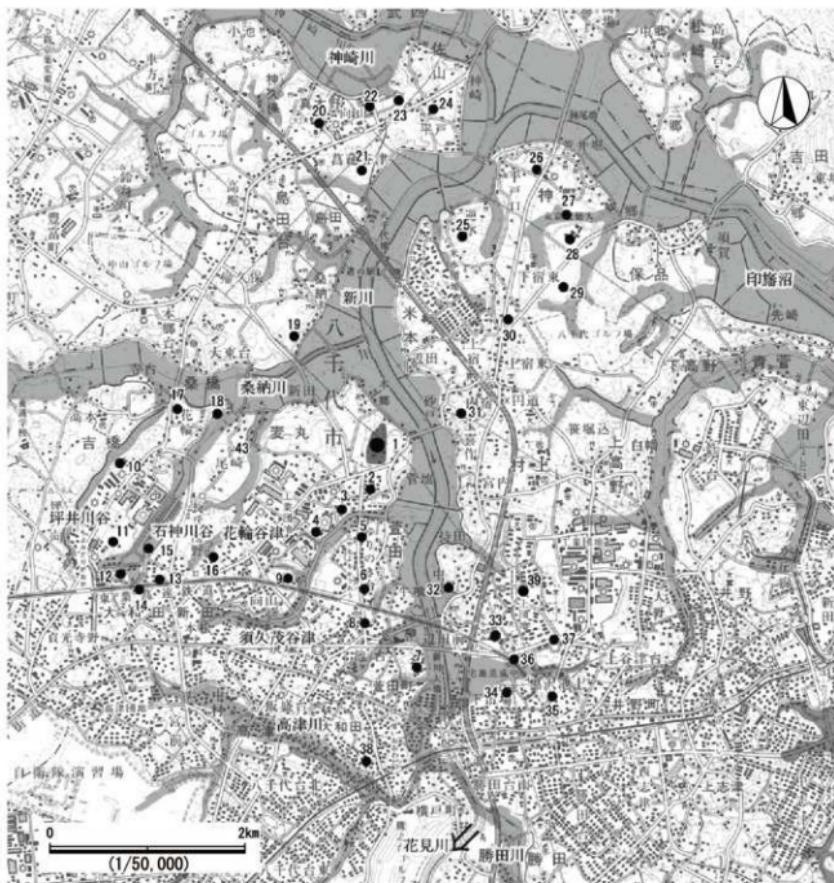
縄文時代では、早期撫糸文期～条痕文期にかけての炉穴や陥し穴が多数検出された権現後遺跡(2)、ヲサル山遺跡(3)が本遺跡の南方に連なっている。川崎山遺跡(7)でも溝型の陥し穴が台地縁辺部に構築されている。花輪谷津と坪井川谷に挟まれた台地上の西内野遺跡(10)では中期阿玉台式を主体としながらも、早期田戸下層式、前期浮島・興津式の土器も出土し、陥し穴群や土坑群が検出されている。その最奥部では、内野南遺跡(11)、黒浜式の仲ノ台遺跡(12)、マイノ作遺跡(13)、マイノ作南遺跡(14)、大和田新田芝山遺跡(15)が所在し、多数の陥し穴や早期の炉穴、黒浜式期堅穴建物跡を中心に展開している。特に陥し穴はこれまでに100基以上が確認されており、早期から前期にかけて狩猟場としての利用が活発であったことがうかがわれる。一方、中期になると市内では遺跡数が次第に減少していくようである。五領ヶ台式期では土坑墓が検出された上谷遺跡(29)、阿玉台式期の堅穴建物跡が検出されたヲサル山遺跡・ヲサル山南遺跡(4)、加曾利E式期の堅穴建物跡を検出した松原遺跡(20)、向山遺跡(9)、田原窪遺跡(23)、長兵衛野南遺跡(16)などが認められるものの、後・晩期にいたってはさらに減少傾向は強まっていくようである。

弥生時代になると、中期は宮ノ台式期の栗谷遺跡(28)、逆水遺跡(25)、田原窪遺跡が散見される程度であったが、後期になると増加傾向に転じ、古墳時代初頭にかけて大規模な集落が点在している。萱田遺跡群（権現後遺跡、ヲサル山遺跡、北海道遺跡(5)、井戸向遺跡(6)、白幡前遺跡(8)）で172棟、川崎山遺跡で55棟、新川を挟んだ保品・神野地区では栗谷遺跡で91棟、上谷遺跡で61棟、境堀遺跡(27)で31棟、さらに新川と神崎川の合流地点となる半島状の台地には佐山台遺跡(22)で229棟、道地遺跡(24)で81棟、間見穴遺跡(21)で52棟が検出され、該期の拠点的な集落が展開したとみられる。

古墳時代中期には、再度一転して集落の規模が縮小に向かい、後期になるとその傾向がさらに強まっていく。堅穴建物跡件数を前代と比較しても、後期には権現後遺跡で10棟、北海道遺跡で12棟、川崎山遺跡で2棟というように減少は一目瞭然である。他の地区でも同様の傾向がうかがわれ、道地遺跡でも5棟の検出に留まっている。周辺の古墳・古墳群に目を向けてみると、5世紀中頃に比定される神野芝山古墳群(26)二号墳は直径約50mの円墳で、刀、鏡、石枕などが出土している。5世紀末～6世紀代とみられる桑納古墳群(19)二号墳は帆立貝形古墳で埴輪を伴っていることが確認されている。6世紀代の築造とみられる根上神社古墳(33)は全長約50mを測り、市内最大の前方後円墳となっている。6世紀中頃～7世紀中頃にかけて築造されたとみられる間見穴遺跡には円墳5基が所在し、箱式石棺から人骨が出土している。7世紀代以降は、円墳の沖塚古墳(34)、方墳では横穴石室を有した村上一号墳(39)、箱式石棺の黒沢台古墳(35)、堰場台古墳(38)などが点在する。

八千代市の中・近世の遺跡は、城館跡と塚群が主体となって展開している。城館跡では13世紀後半から続く正覚院館跡(32)があり、方形居館の可能性が指摘されている。戦国期になると吉橋城跡(18)、米本城跡(31)が存在し、妙見前遺跡(17)では吉橋城跡に関連した堀や地下式坑が検出され、下宿東遺跡(30)では15世紀後半を中心として陶磁器類が出土していることから、米本城跡に付随した城下集落とみられている。一方、これまでに調査が実施された塚・塚群は、ほとんどが近世の所産と考えら

れている。村上第1塚群(36)、村上第2塚群(37)は古墳を含む22基で構成され、第2塚群に所在する「村上供養塚」(001号塚)では、封土内から銅銭を埋納した常滑壺が出土し、銭の铸造年代から17世紀後半の築造とされている。風見穴遺跡には古墳を再利用した塚が認められるなど、八千代市域にはこれら民間信仰の対象となった200基以上に及ぶ塚の存在が知られている。

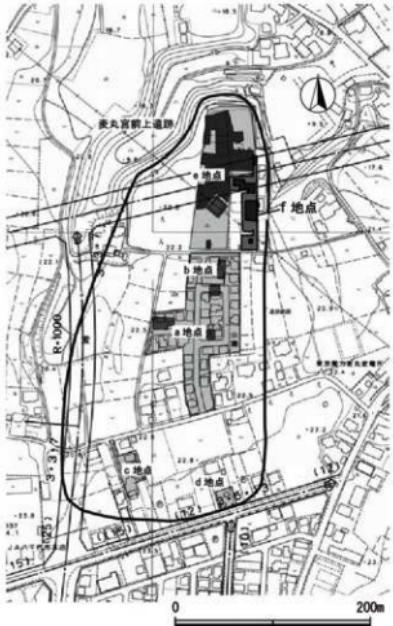


- | | | | | | |
|------------|-------------|---------------|-------------|------------|------------|
| 1. 麦丸宮前上遺跡 | 8. 白幡前遺跡 | 15. 大和田新田芝山遺跡 | 22. 佐山台遺跡 | 29. 上谷遺跡 | 36. 村上第1塚群 |
| 2. 権現後遺跡 | 9. 向山遺跡 | 16. 長兵衛野南遺跡 | 23. 田原窪遺跡 | 30. 下宿東遺跡 | 37. 村上第2塚群 |
| 3. ラサル山南遺跡 | 10. 西内野遺跡 | 17. 妙見前遺跡 | 24. 道地遺跡 | 31. 米本跡 | 38. 墳場台古墳 |
| 4. ラサル山南遺跡 | 11. 内野南遺跡 | 18. 吉橋城跡 | 25. 逆水遺跡 | 32. 正覚院跡 | 39. 村上一号墳 |
| 5. 北海道遺跡 | 12. 仲ノ台遺跡 | 19. 桑納古墳群 | 26. 神野芝山古墳群 | 33. 根上神社古墳 | |
| 6. 井戸向遺跡 | 13. ライノ作遺跡 | 20. 松原遺跡 | 27. 墓堀遺跡 | 34. 沖塚古墳 | |
| 7. 川崎山遺跡 | 14. ライノ作南遺跡 | 21. 間見穴遺跡 | 28. 栗谷遺跡 | 35. 黒沢台古墳 | |

第4図 周辺遺跡分布図

第4節 麦丸宮前上遺跡における既往の調査

麦丸宮前上遺跡では、これまでに6地点（0・a～e地点）の調査が行われている（第5図・第1表）。報告によれば、最初に発掘調査が行われたのは昭和55（1980）年である。この時点では麦丸遺跡が本遺跡を含んでいたため、後に「0地点」と仮称されている。調査の結果、遺構は検出されなかつたものの少量の縄文土器と砥石が出土した。その後しばらくの間調査が行われることはなかったが、平成後半になり、麦丸宮前上遺跡として数次の調査が行われた。a地点とされた調査区は遺跡範囲のはば中央に位置し、竪穴建物跡4棟が検出された。出土遺物には古墳時代後期～奈良・平安時代の時期のものが認められるが、建物跡は奈良・平安時代が主体である（2010）。統いて北側隣接地で行われたb地点でも奈良・平安時代の竪穴建物跡2棟が確認され、中央部から北側にかけて該期の集落が展開する可能性を指摘している（2011）。一方、南端にあたるc地点の調査では、遺構、遺物ともに検出されなかつた（2011）。南西側のd地点でも近代以降の溝と土坑のみで、遺構とすべきものは認められなかつた。さらに遺物も出土していないことから、遺跡の南側ほど遺構密度が希薄であると認識されている（2016）。e地点は台地北側から先端部にかけての範囲で調査が行われ、縄文時代の土坑12基、遺物包含層2ヶ所、弥生時代の竪穴建物跡4棟、古墳時代前期の竪穴建物跡2棟、奈良・平安時代の竪穴建物跡2棟、掘立柱建物1棟、中・近世の溝跡2条など、断続的な生活の痕跡が確認された。出土遺物では、縄文時代の遺物包含層から出土した無文土器が特筆され、角底を呈した形態から、縄文時代草創期の所産とみられる（2018）。



第5図 調査範囲及び既往の調査地点

第1表 麦丸宮前上遺跡調査一覧表

地点名	検出された主な遺構と遺物	
	遺構	遺物
0 地点	なし	縄文土器、砥石 文献 未報告
a 地点	奈良・平安時代：竪穴建物跡4種 土師器（古墳時代後期～奈良・平安時代） 2010 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成21年度』 文献 八千代市教育委員会	なし
b 地点	奈良・平安時代：竪穴建物跡2種 土師器（奈良・平安時代） 2011 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成22年度』 八千代市教育委員会	なし
c 地点	なし	なし 文献 2011 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成22年度』 八千代市教育委員会
d 地点	近代以降：溝跡、土坑 土器（近世以降） 文献 2016 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成27年度』 八千代市教育委員会	なし
e 地点	縄文時代：土坑12基、遺物包含層2ヶ所 弥生時代：竪穴建物跡2種、ピット6基 古墳時代：（前期）竪穴建物跡2種 奈良・平安時代：竪穴建物跡5棟、掘立柱建物跡1棟 中・近世：溝跡2条、土坑27基 文献 2018 『麦丸宮前上遺跡 e 地点発掘調査報告書』日新住宅㈱株式会社・八千代市教育委員会・地域文化財研究所	なし

※ 第5図は、1/2,500「八千代市都市図」を1/5,000に縮小し、加筆した。

※ 第1表は、各地点の文献を元にして作成した。

第2章 検出された遺構と遺物

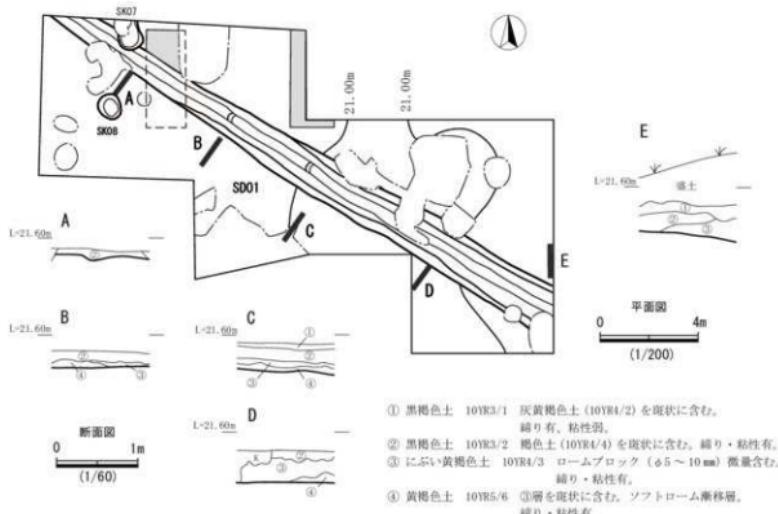
第1節 調査の概要

本地点は、平成29年から30年にかけて実施されたe地点の東側に隣接している（第2・5図）。e地点で調査されたSII1及びSD2が、本地点にかけて連続することは確実であることから、それらを中心に、事前に行われた確認調査で検出した遺構プランの範囲を含めて調査区が設定された（第1図）。

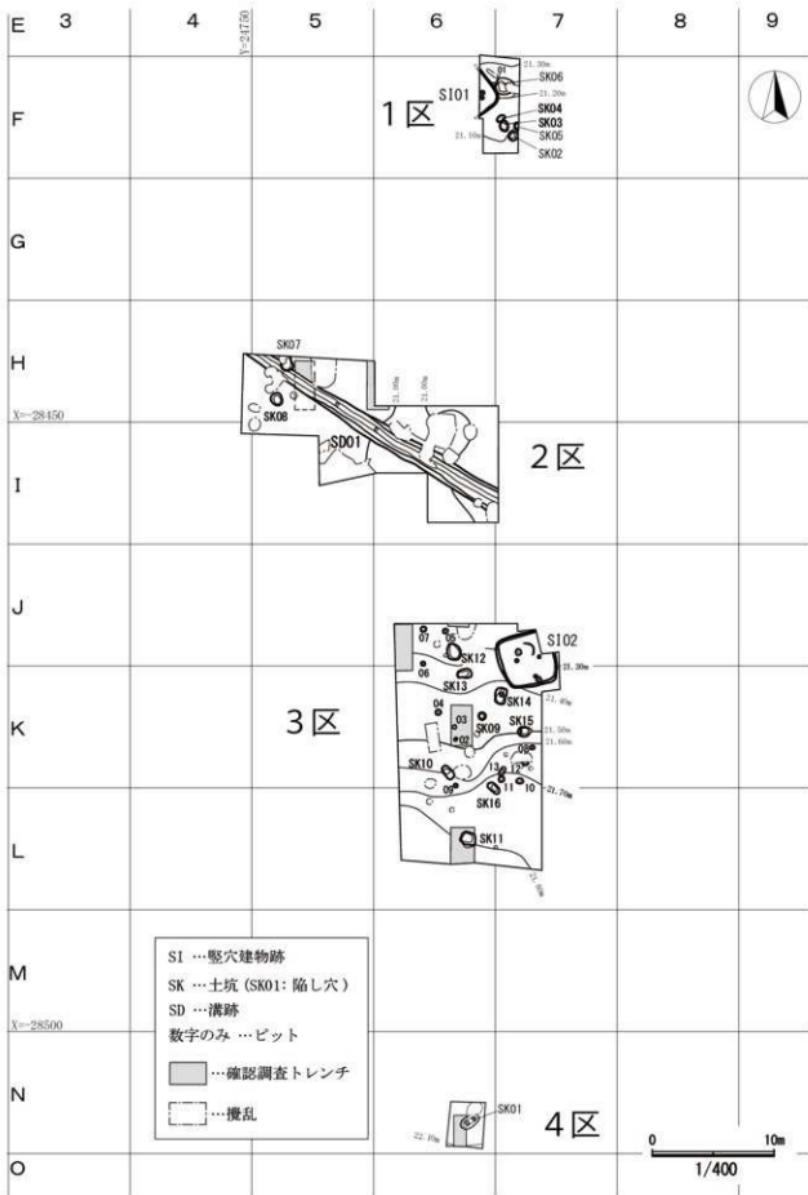
本地点の現況は平坦地であったが、表土除去後により、これらは盛土によって整地されたもので、本来の地形は2区周辺に埋没谷が入り込んでいることが判明した。この谷を挟んだ南北両側は、徐々に標高が高くなり、谷に向かって傾斜地が形成されている。遺構検出面は各区ともに盛土直下のローム漸移層④層になるが、2区東側に限っては埋没谷①～②層上面が検出面となっていた（第6図）。

検出された遺構は、縄文時代の陥し穴1基、土坑6基、ピット6基、古墳時代の堅穴建物跡2棟、土坑1基、中・近世の土坑8基、ピット7基、溝跡1条である。縄文時代の遺構は、4区に所在する陥し穴以外は、1区・F7グリッドと3区K7・グリッド内に集中し、古墳時代の堅穴建物跡は谷部を挟んで対峙するように構築されている。中・近世の土坑・ピット群は、各調査区に散在し規則性は見出せない。溝は谷部に向かって直線状に延びており、谷部方向を意識したことが垣間見られる。

出土した遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（壺）、古墳時代の土師器（壺・壺・台付壺）、土製品（勾玉）、奈良・平安時代の須恵器（壺）、近世以降の陶磁器（碗・皿）など総量で249点である。縄文土器は中期を主体とし後期前半まで認められる。弥生土器は後期の所産とみられ、e地点検出の該期堅穴建物跡との関連性をうかがわせるが、ほとんどが微細片であるため特定するのは難しい。古墳時代の土師器はSI02から出土したものが中心で、前期と後期の遺物が混在している。



第6図 2区土層断面図



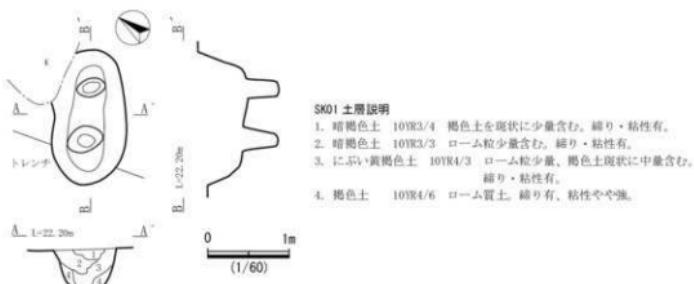
第7図 調査区全体図

第2節 繩文時代・弥生時代

(1) 陥し穴

SKO1 (第8図、図版3)

【位置】4区、N 6グリッドに位置する。北側上端が攪乱でわずかに壊されている。【形態・規模】平面は長楕円形を呈し、長軸上底面に2基のピットが穿たれている。規模は長軸1.67m、短軸0.87m、深さ49~59cmで南西側が高くなっている。ピットは2基ともに楕円形で、北東側が長軸0.36m、短軸0.22m、深さ31cm、南西側が長軸0.47m、短軸0.30m、深さ33cmを測る。長軸方向はN-57°-Eを示す。【覆土】暗褐色土、にぶい黄褐色土を主体とする自然堆積である。ピット内の覆土は3層に類似したにぶい黄褐色土の単層で締りが弱い。【遺物】出土していない。【所見】底面のピットは逆茂木を刺すために穿たれた小穴と判断される。覆土の状態や遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第8図 SKO1

(2) 土坑

SKO2 (第9図)

【位置】1区のF 7グリッドに位置する。【形態・規模】平面はほぼ円形で、断面はレンズ状を呈する。規模は長軸0.78m、短軸0.74m、深さ34cmを測る。長軸方向はN-55°-Eを示す。【覆土】暗褐色土主体の2層に分層された自然堆積である。【遺物】遺構内からではないが、検出面より上で縄文土器1点（第12図・2）が出土している。【所見】時期は覆土の状態から縄文時代と考えられる。

SKO3 (第9図)

【位置】1区のF 7グリッドに位置する。【形態・規模】平面は楕円形で、断面はレンズ状を呈する。規模は長軸0.87m、短軸0.68m、深さ17cmを測る。長軸方向はN-13°-Wを示す。【覆土】にぶい黄褐色土主体で3層に分層された自然堆積である。下層に黒褐色土の薄い層（2層）が認められる。【遺物】出土していない。【所見】時期は覆土の状態から縄文時代と考えられる。

SKO4 (第9図)

【位置】1区のF 7グリッドに位置する。【形態・規模】平面は楕円形で、断面は皿状を呈する。規模は長軸0.77m、短軸0.44m、深さ12cmを測る。長軸方向はN-56°-Eを示す。【覆土】暗褐色土の単層である。【遺物】出土していない。【所見】時期は覆土の状態から縄文時代と考えられる。

SK05 (第9図)

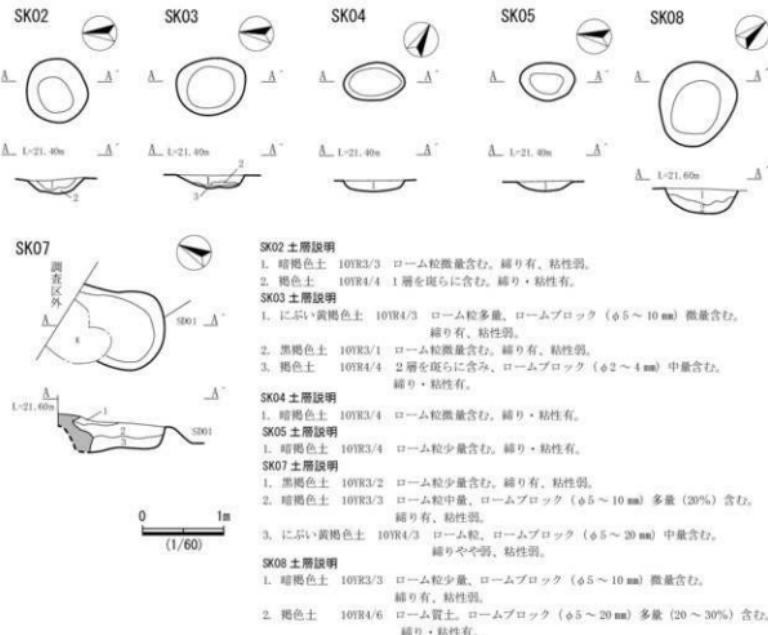
【位置】 1区のF7グリッドに位置する。【形態・規模】 平面は梢円形で、断面は皿状を呈する。規模は長軸 0.68 m、短軸 0.45 m、深さ 11cm を測る。長軸方向は N - 4° - W を示す。【覆土】 暗褐色土の単層である。【遺物】 出土していない。【所見】 時期は覆土の状態から縄文時代と考えられる。

SK07 (第9図、図版3)

【位置】 2区のH5グリッドに位置する。南側で SD01 に切られる。北側が調査区外になり、西壁の一部が攪乱で壊されている。【形態・規模】 平面は梢円形とみられ、断面は逆台形を呈する。底面中央部がわずかに高い。規模は長軸が現存値で 1.18 m、短軸 0.98 m、深さ 41cm を測る。長軸方向は N - 7° - W を示す。【覆土】 暗褐色土、にぶい黄褐色土主体で、ロームブロックが多く含んでいることから人為堆積と考えられる。【遺物】 出土していない。【所見】 時期は覆土の状態から縄文時代と考えられる。遺構形態は陥穴とした SK01 に類似するが、逆茂木の痕跡は認められない。

SK08 (第9図、図版3)

【位置】 2区のH5グリッドに位置する。【形態・規模】 平面はほぼ円形で、断面はレンズ状を呈する。規模は長軸 1.04 m、短軸 0.89 m、深さ 31cm を測る。長軸方向は N - 36° - W を示す。【覆土】 暗褐色土と褐色土の2層に分層された自然堆積と考えられるが、下層（2層）はロームブロックが多く含まれ、人為的である。【遺物】 出土していない。【所見】 時期は覆土の状態から縄文時代と考えられる。

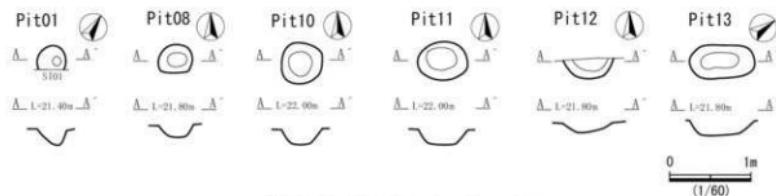


第9図 SK02～・05・07・08

(3) ピット

本地点で検出されたピットは13基あり、その内Pit01・08・10～13の6基は、縄文時代のピットと考えられる。いずれのピットからも遺物は出土していないが、覆土の状態が縄文時代の土坑に類似する点などを根拠に該期のピットと判断した。覆土は、含有されるローム粒が少量で、締りがやや強い黒褐色土や暗褐色土を主体としている。配置については特に規則性は見出せないが、Pit01を除いては3区・K7グリッドに集中する傾向にある。

各ピットについては第10図に一括して掲載し、第2表に詳細を記した。



第10図 Pit01・08・10～13

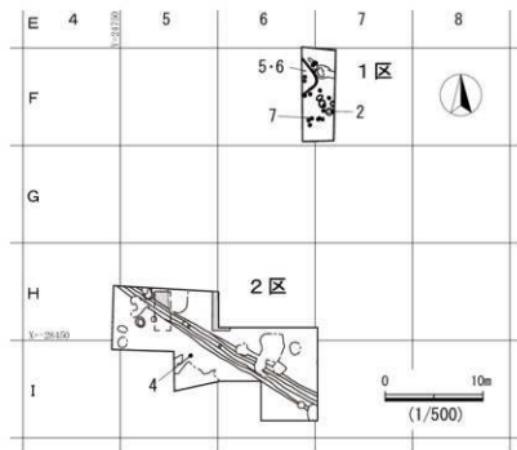
第2表 縄文時代ピット一覧表

遺構名	区	位置 (グリッド)	平面形	規模(cm)			覆土・特徴・その他	出土 遺物	備考
				長軸	短軸	深さ			
Pit01	1	F 6	円形	35	(31)	19	単層。10TR3/4暗褐色土、ローム粒少量。	なし	SI01に切られる。
Pit08	3	K 7	楕円形	43	36	14	単層。10TR3/1黒褐色土、ローム粒微量。	なし	
Pit10	3	K 7	円形	55	50	18	単層。10TR3/1黒褐色土、ローム粒微量。	なし	
Pit11	3	K 7	楕円形	63	47	17	単層。10TR3/1黒褐色土、ローム粒微量。	なし	
Pit12	3	K 7	（円形）	62	(26)	13	単層。10TR3/1黒褐色土、ローム粒少量。	なし	北半分は擾乱。
Pit13	3	K 7	長楕円形	79	41	18	単層。10TR3/1黒褐色土、ローム粒微量。	なし	ピット2基重複か。

(4) 遺構外出土遺物

縄文土器は10点が出土した（第3表）。しかし、縄文時代の遺構は検出されているものの、その遺構から該期の遺物は出土していない。SK02の上部から深鉢胴部片が1点（第12図・2）出土したもの、明らかに検出面より上層より出土しているため、SK02に関連しているかは不明瞭である。それ以外は古墳時代の竪穴建物跡（SI02）、中・近世の溝跡（SD01）といった後世の遺構への流れ込みか表面採集されたものがほとんどである。いずれの土器片も細片で、図示できたのは4点のみであった（第12図・1～4）。1の口縁部片は、2列の沈線が口縁に沿って巡っている。浅い形状とみられ、縄文中期後半の鉢型土器であろう。2・3は縄文が継回転で施文されており、縄文中期の深鉢胴部片である可能性が高い。4は深鉢の底部片で、胴部下端が外側へ突出した形態から後期前半の所産と考えられる。

弥生土器は37点が出土した（第3表）。その内、SI01の覆土内を含め、1区からの出土が約80%を占めている。これは隣接するe地点で弥生時代の竪穴建物跡が検出されていることから、本地点の1・2区周辺に流れ込んだと考えられる。前述した縄文土器と同様に、こちらも1cmに満たない細片が多く、図示できたのは3点のみであった（第12図・5～7）。5は複合口縁の複合部で、付加条縄文により羽状構成がとられている。6は頸部から胴部にかけての破片で結節回転文が施文されている。7は底部片で、底面には木葉痕が認められる。



第11図 遺構外出土遺物分布図



第12図 遺構外出土遺物

第4表 遺構外出土遺物観察表

遺構 番号	表面 番号	種類 器種	直徑 高さ 底径	部位・残存率・製作技法・その他の特徴	胎土	色調 (外面・内面)	施成	出土位置
遺構 外	1	縄文土器 深鉢	(3, 8) —	口縁部下、口縁直下に2列の沈籠を沿せ。以下に単底R L。 縄文を縦回転で施文。	白色砂粒多	褐色35R6/6; 褐色7.5YR1/6	普通	E6グリッド
	2	縄文土器 深鉢	(6, 5) —	脚部分。単底L R。縄文を縦回転で施文。	雪片・長石、 チャート、白色砂粒	赤褐色5YR4/6; 灰褐色10YR5/2	普通	F7グリッド
	3	縄文土器 深鉢	(1, 0) —	脚部分。複底L R L。縄文を縦回転で施文。	白色砂粒。石英微 量	に赤い赤褐色5YR5/4; に赤い褐色7.5YR5/4	良好	S102上層
	4	縄文土器 深鉢	(2, 3) (8, 9)	脚部下端～底部。内外面ともナデ。	白色・透明砂粒、 白色砂粒、 白色針状物質	に赤い赤褐色5YR5/4; に赤い褐色7.5YR5/4	普通	I5グリッド
	5	弥生土器 壺	(2, 5) —	複合の縦縫合部。複合部には付加条第1種縄文を施し、縦回転の 双方で施文し、羽状構造をとる。口部にも同じ原体の縄を 用いて施文。	白色、透明砂粒、 白色砂粒、 白色針状物質	褐色7.5YR6/6; 褐色35R6/6	良好	S101上層
	6	弥生土器 壺	(4, 8) —	脚部～脚部断片。脚部に結節回転縄文。付加条第1種縄文を施 文。	白色砂粒多、 白色砂粒、 白色針状物質	に赤い褐色7.5YR5/4; に赤い褐色7.5YR5/4	良好	S101上層
	7	弥生土器 壺	(1, 6) (7, 2)	脚部下端～底部片。脚部に太目の輪縄を用いた付加条縄文を 施文。底部底面は木座痕	白色、透明砂粒、 白色針状物質	に赤い赤褐色2.5YR1/4; に赤い褐色5YR1/4	普通	F6グリッド

第3表 縄文土器・弥生土器集計表

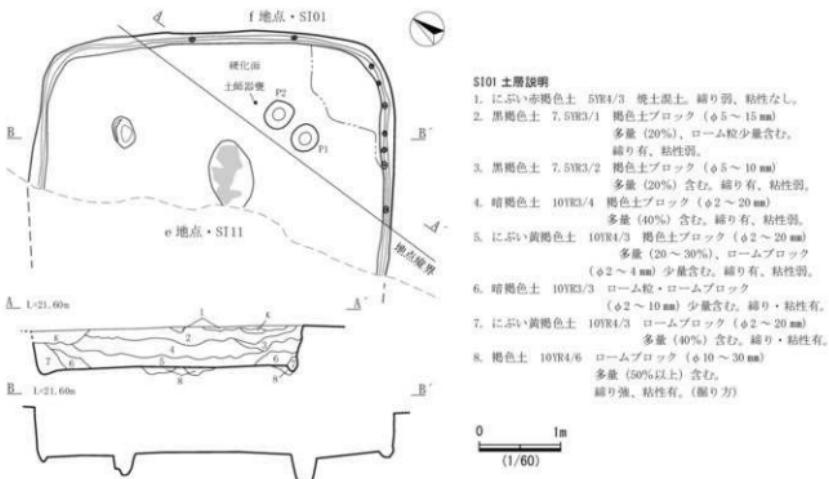
出土 地点(層位・付加) 番号	種類 種別	縄文土器		弥生土器		合計
		深鉢	蓋	個体	破片	
S101	上層				11	11
S102	上層			1		1
SK17	覆土				1	1
S001	覆土			1	4	5
1区	F6+7.5YR1/4表採			6	19	25
2区	15YR7/4表採			1	1	2
	16YR7/4表採				1	1
3区	K67T5/4覆土			1		1
	合計			0	10	32
						47

第3節 古墳時代

(1) 壓穴建物跡

SIO1 (第13図、第5表、図版3)

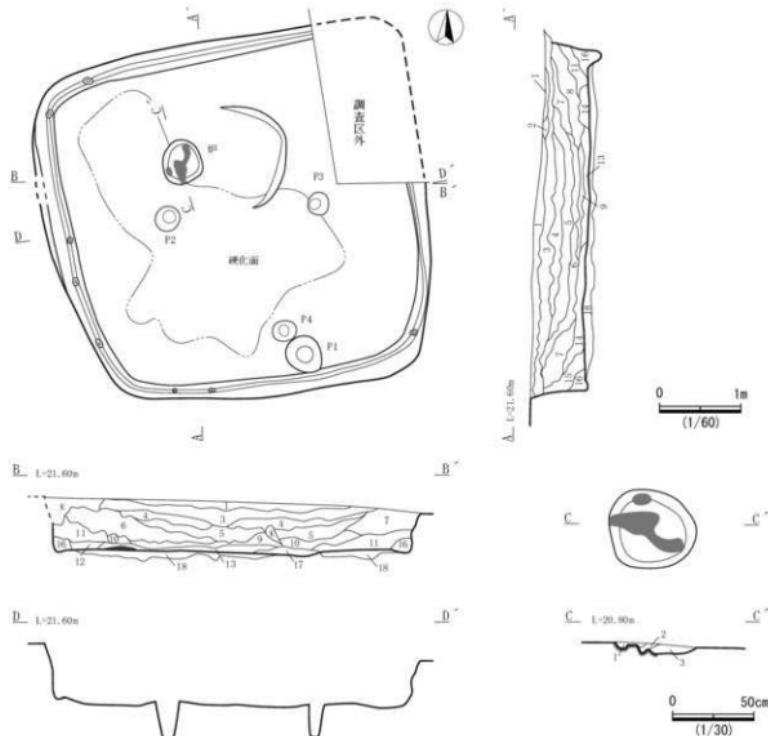
【位置】1区のF6・7グリッドに位置する。e地点のSI11と同一の建物跡で、その東側隅に該当する。【形態・規模】平面は隅丸方形を呈する。本地点検出部分の規模は、現存値で北西～南東が2.42m、北東～南西が1.80m、深さ47cmを測る。e地点SI11と合わせて見た平面規模は、北西～南東が4.47m、北東～南西が2.80m以上である。主軸方向はN-53°-Eを示す。【覆土】上層で黒褐色土、褐色土、下層でいぶい黄褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。e地点で観察した地点のはば同じ箇所を観察しているため堆積状況にさほど差異は認められないがローム質土の褐色土ブロックがやや多く含まれている。【床面・壁】床面は平坦で隅周辺以外は硬化している。壁は垂直に立ち上がり、壁際には幅10cm、深さ12cm程の周溝が巡る。溝の底には不等間隔で径4～8cm程の小穴が9基認められた。これはe地点では気付かなかった掘り込みである。【ピット】P1・2が検出された。P1は径33cm、深さ24cmでe地点SI11・P1との位置関係や同様の規模などから主柱穴と判断される。P2は径36cm、深さ10cmの浅いピットで性格は不明瞭である。【炉】e地点SI11の範囲内に検出されている。【遺物】弥生土器11点、土師器甕2点が出土した。弥生土器は全て上層からの出土で、細片のみである。一方、土師器は壺胴部の小片で図示はできなかったが、その内1点は床直上から出土している。【所見】出土遺物から時期を特定することは困難であるが、遺構の形態やe地点SI11の成果などを踏まえ、本建物跡の時期は古墳時代前期と考えられる。



第13図 SIO1

第5表 SIO1出土遺物集計表

出土 種別 部位	縄文土器		弥生土器		土師器		須恵器		土器		陶器		土製品		骨石		
	深鉢	深鉢	壺	壺	合付壺	壺	壺	壺	内耳錫	縄・皿	勾玉	未製品	側体	側体	側体	側体	
SIO1 上層				11		1											
下層・床直上							1										
合計	0	0	0	11	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0



S102 土層説明

- 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒微量含む。繊りやや強、粘性弱。
- にぶい暗褐色土 10YR4/3 ロームブロック ($\phi 2 \sim 10$ mm) 少量含む。繊り有、粘性弱。
- 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒・焼土粒微量含む。繊りやや強、粘性弱。
- 黒褐色土 7.5YR2/1 ローム粒微少、焼土粒少量含む。繊り有、粘性弱。
- 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒中量、焼土粒・焼土粒ブロック ($\phi 2 \sim 4$ mm) 少量含む。繊り有、粘性弱。
- 暗褐色土 7.5YR3/2 ローム粒・焼土粒少量含む。繊り有、粘性弱。
- 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒中量、焼土粒少量含む。繊り有、粘性やや有。
- 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒中量。ロームブロック ($\phi 2 \sim 10$ mm) 少量含む。繊り有、粘性やや有。
- 褐色土 7.5YR4/3 ロームブロック ($\phi 2 \sim 10$ mm)・焼土粒少量含む。繊り有、粘性弱。
- 褐色土 7.5YR4/4 ロームブロック ($\phi 5 \sim 20$ mm) 中量含む。繊り・粘性有。
- 褐色土 10YR4/4 ロームブロック ($\phi 2 \sim 30$ mm) 中量含む。繊り・粘性有。
- 褐色土 10YR4/6 ロームブロック ($\phi 2 \sim 50$ mm) 中量含む。繊り・粘性有。
- 褐色土 7.5YR4/4 ローム粒中量、焼土粒・焼土粒ブロック ($\phi 2 \sim 4$ mm) 多量 (20%) 含む。繊り有、粘性弱。
- 褐色土 7.5YR4/3 ローム粒中量、ロームブロック ($\phi 2 \sim 10$ mm) 微量、焼土粒少量含む。繊り・粘性有。
- 褐色土 10YR4/4 ローム粒・ロームブロック ($\phi 2 \sim 4$ mm) 少量含む。繊り・粘性有。
- にぶい暗褐色土 10YR4/3 ロームブロック ($\phi 20 \sim 50$ mm) 密に含む。繊り強、粘性有。(振り方)

S102 伊土層説明

- 黒褐色土 5YR3/1 焼土粒・焼土粒ブロック ($\phi 2 \sim 4$ mm) 少量含む。繊りやや弱、粘性弱。
- 暗褐色土 7.5YR4/3 焼土粒少量、ロームブロック ($\phi 2 \sim 4$ mm) 微量含む。繊りやや弱、粘性弱。
- 褐色土 7.5YR4/3 ロームブロック ($\phi 2 \sim 10$ mm) 中量含む。繊り・粘性有。

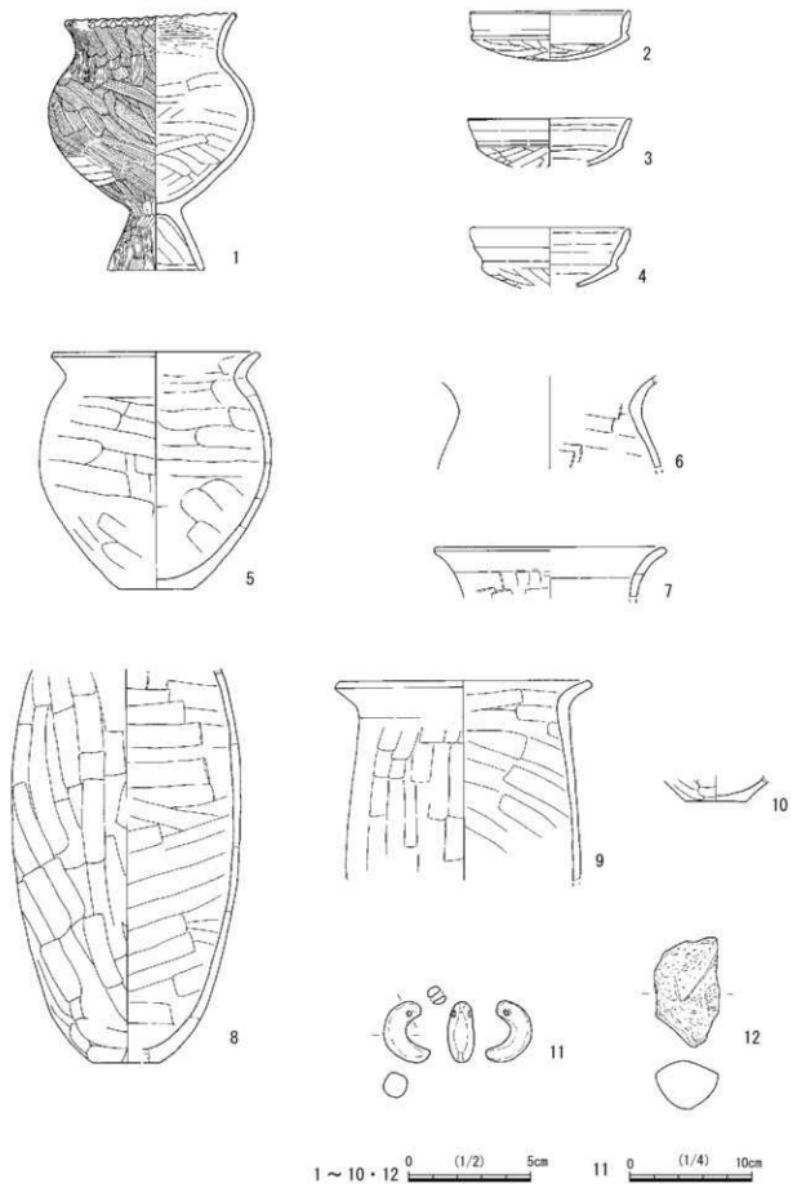
第14図 S102

S102 (第14~16図、第6・7表、図版4~6)

【位置】3区のJ7、K7グリッドに位置する。北東隅は電信柱が近接していたため、安全上の理由から掘削を避けている。【形態・規模】平面形は隅丸方形を呈する。規模は、東西軸4.68m、南北軸4.45m、深さ67cmを測る。主軸方向はN-15°-Wを示す。【覆土】上層(1~8層)は黒褐色土、暗褐色土を主体とした自然堆積である。下層(9~17層)は褐色土を主体とし、焼土粒・焼土ブロックが多く含まれている。炉を中心とした建物跡北側の床直上では、焼土や炭化材が分布することから焼失家屋と判断される。【床面・壁】床はほぼ平坦であるが、中央部のやや北寄りで炉を囲むようなわずかな段差が認められた。掘り方は西壁側がやや深めに掘り込まれ、ロームブロックを密に含んだにぶい黄褐色土で貼り床を施している。炉の西側から南側のP1にかけて硬化していた。壁はほぼ垂直であるが、上端部付近の際は崩れたためかやや開いて立ち上がる。壁際には幅10~14cm、深さ3~5cm程の周溝が巡る。溝の底には不等間隔で径8~10cm程の小穴が8基認められた。【ピット】床面上ではP1のみの確認に留まったが、床を除去した際に新たにP2~4が検出された。P1の覆土が暗褐色土であったのに対しP2~4は貼り床に類似したロームブロックを多く含んだにぶい黄褐色土であった。床が修復されたと仮定するならば、床の貼り替えと同時に埋められた可能性が考えられる。規模は、P1が径48cm、深さ17cm、P2が径32cm、深さ41cm、P3が径28cm、深さ41cm、P4が径30cm、深さ14cmを測る。P2・3は配置や規模から主柱穴とみられ2本柱構造の建物跡となる。P1・4は出入口施設のピットで、P4からP1で造り替えられたと考えられる。【炉】中央からやや北西寄りで検出された。平面はほぼ円形を呈し、規模は最大径52cm、深さ6cmで、火床面の遺存は良くない。【遺物】土師器の壺・甕を中心に遺物の出土位置は概ね二分される。1は建物北西隅寄りで下層9~10層中に投棄されている。2~10は建物内の北東側で1~3層中から出土し、特に北壁寄りでは土師器甕がまとまっている。11の土製勾玉は床直上、12と輕石は東壁際の周溝上からの出土である。【所見】出土位置と同様に、遺物の時期も二分される。下層から出土した1の台付甕は、ハケ調整で口縁部にキザミを加えた形態から古墳時代前期前半の遺物とみられる。一方、上層から出土した土師器群は、壺の形態などから古墳時代後期の所産と考えられる。建物の形態は古墳時代前期の構造であることから、本建物跡は、焼失後の埋没過程で、古墳時代後期の遺物が投棄されたと理解される。



第15図 S102 遺物出土分布図



第 16 図 S102 出土遺物

第6表 SiO₂出土遺物集計表

出土 場所 層位・グリッド	種類			土師器			須恵器			土器			陶磁器			土製品			鉱石	
	赤陶土器			土師器			須恵器			土器			陶磁器			土製品			鉱石	
	深鉢	蓋	壺	坏	甕	合付甕	瓶	壺	破片	内耳焼	碗	壺	破片	甕	壺	破片	鉄	銅	未製品	
S102 上層 下層・床直上				1	2	1	2	154	16	1			1			1			1	1
合計	0	1	0	0	2	1	2	156	1	0	0	16	0	0	0	1	0	0	1	0

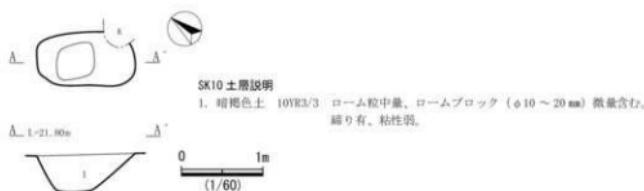
第7表 SiO₂出土遺物観察表

遺構 番号	表面 形態	種類 記載	白種 高さ 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴				断土	色調 (外面:内面)	焼成	出土位置
				部位	残存率	製作技法	その他特徴				
1	土師器 台面	13.7 23.0 7.8	口縁部外縁にキズ。口縁部底下～瓶底上半は斜 方向。下半～台部では織目地のハック。中位に横方向のハ ックで「部ミガキ」。台部は摩耗。内面口縁部は横方向へラ ギカキ。腹部・台部は横・斜方向へラギカキ。	白色・透明砂粒、 褐色斑、白色状物 質。	灰褐色7.5YR5/2: ぶい赤褐色5YR4/4	良好	床直上12cm				
2	土師器 坏	13.9 4.1	60%存。口縁部ヨコナダ。体部～底部へラギカキ。内面口縁 部～底部にかけヨコナダ。底部は横方向ヨコナダ。内外面黒色執 用。	白色・透明砂粒、褐 色斑、白色状物質	墨褐色10YR3/2: 褐色5YR3/1	良好	床直上4cm				
3	土師器 甕	13.2 (3.9)	70%存。口縁部ヨコナダ。体部へラギカキ。内面口縁部～体 部ヨコナダ。内外面ともに黑色処理が施すに残存。	白色・透明砂粒、 褐色斑、(チャートカ)少	ぶい赤褐色5YR5/4: 赤褐色5YR1/6	良好	床直上4cm				
4	土師器 甕	(13.0) (4.8) —	40%存。口縁部ヨコナダ。体部へラギカキ。内面口縁部～体 部ヨコナダ。内外面ともに黑色処理が施すに残存。	透明砂粒、褐色斑、 褐色6多	ぶい赤褐色5YR5/4: 褐色5YR4/4	良好	床直上4cm				
5	土師器 甕	16.7 19.3 6.0	50%存。口縁部～瓶底ヨコナダ。瓶部斜方へラギカキ。内 面口縁部～瓶部横方向へラギカキ。	石英、長石、 白色・透明砂粒多、 白色状物質	ぶい赤褐色5YR5/4: ぶい褐色2.5YR5/4	普通	床直上6cm				
S102	6	土師器 甕	(7.5)	頭部～瓶上部。外面は摩耗・剥離顯著で調整不鮮明。内面 斜方向へラギカキ。	石英、長石、 白色・透明砂粒多、 褐色斑	ぶい赤褐色5YR5/4: ぶい赤褐色5YR4/4	普通	床直上5cm			
7	土師器 甕	(19.0) (4.1)	口縁部～瓶底部。口縁部ヨコナダ。底部以下瓶方向へラギカ キ。内面ヨコナダ。	石英、長石、 白色斑、角閃石	ぶい褐色7.5YR6/3: ぶい褐色7.5YR5/3	良好	床直上5cm				
8	土師器 甕	(32.0) (5.3)	50%存。瓶底縫合方向、下縫合方向へラギカキ。底部へラギカ キ。内面横方向へラギカキ。	石英、長石、チャ ート、白色粒多、 角閃石	褐色5YR6/6: 褐色5YR7/6	普通	床直上5cm				
9	土師器 甕	20.3 (16.2) —	20%存。口縁部ヨコナダ。瓶部瓶方向へラギカキ。内面口縁 部横方向、瓶部斜方へラギカキ。	石英、長石、チャ ート、白色粒多、透明 砂粒	ぶい褐色2.5YR5/3: ぶい黄褐色10YR5/3	普通	床直上5cm				
10	土師器 甕	(2.1) (5.0)	瓶部下端～底部。瓶部斜方、底部一方へラギカキ。内 面へラギカキ。	石英、大粒砂粒多	ぶい赤褐色5YR4/3: ぶい赤褐色5YR4/4	普通	床直上5cm				
11	土製品 勾玉	長さ:2.5cm 幅:0.9cm 厚さ:0.9cm	孔径:0.1cm 重さ:3.4g	白色・透明砂粒、白 色状物質	褐色7.5YR6/6	良好	床直上				
12	繩	長さ:8.6cm 幅:5.2cm 厚さ:4.0cm	重さ:25.0g	石材:輕石 未製品:表面に筋状の傷が数か所あり。			床直上				

(2) 土坑

SK10 (第17図)

【位置】3区のK6グリッドに位置する。上端の一部が攪乱により壊されている。【形態・規模】平面は隅丸長方形で、断面は逆台形状を呈する。規模は、長軸12.2m、短軸0.65m、深さ45cmを測る。長軸方向はN-37°-Wを示す。【覆土】暗褐色土の単層で、人為的な堆積と考えられる。【遺物】覆土中から土師器甕1点が出土しているが、胴部片で摩耗が顕著なため図示できなかった。【所見】時期は出土遺物や覆土の状態から古墳時代と考えられる。



第17図 SK10

第4節 中・近世

(1) 土坑

SK06 (第18図)

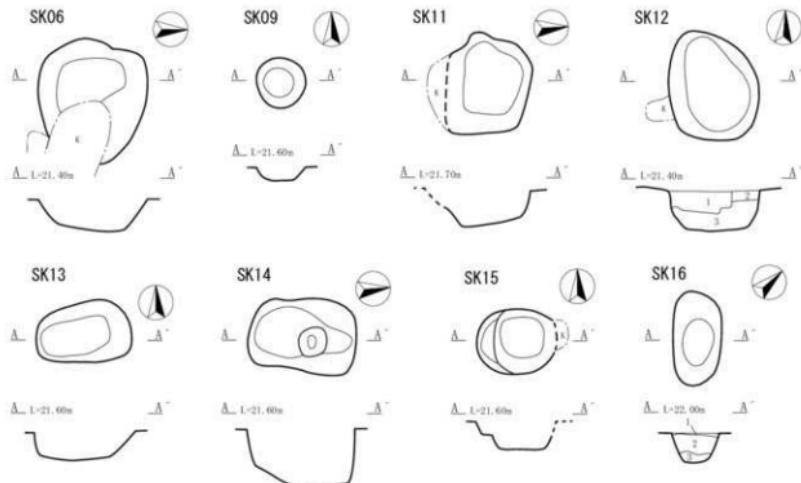
【位置】 1区のE7グリッドに位置する。東側が擾乱で壊される。【形態・規模】 形状は不整形で、規模は長軸1.41m、短軸1.33m、深さ40cmを測る。長軸方向はN-77°-Wを示す。【覆土】 暗褐色土の単層である。【遺物】 出土していない。【所見】 時期は覆土の状態から中・近世と考えられる。

SK09 (第18図)

【位置】 3区のK6グリッドに位置する。【形態・規模】 平面は円形で、断面は皿状を呈する。規模は径0.60m、深さ16cmを測る。【覆土】 ぶい黄褐色土の単層である。【遺物】 出土していない。【所見】 時期は覆土の状態から中・近世と考えられる。

SK11 (第18図、図版5)

【位置】 3区のL6グリッドに位置し、確認調査で検出された遺構である。西側上端が擾乱で壊される。【形態・規模】 平面は不整方形で断面は逆台形を呈する。規模は長軸1.27m、短軸1.05m以上、深さ45cmを測る。長軸方向はN-87°-Wを示す。【覆土】 ロームブロックを多く含むぶい黄褐色土の単層である。【遺物】 土器器窯の細片が検出面から1点出土したが、混入遺物とみられる。【所見】 時期は覆土の状態から中・近世と考えられる。

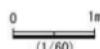


SK12 土層説明

1. 黒褐色土 10YR3/2 ロームブロック（φ2～10mm）少量含む。繊り有。粘性弱。
2. 噴褐色土 10YR3/3 ローム粒・ロームブロック（φ2～4mm）中量含む。繊り有。粘性弱。
3. 黑褐色土 10YR3/2 ロームブロック（φ5～30mm）、ローム土密に含む。繊り・粘性有。

SK16 土層説明

1. 沖色土 10YR4/4 ロームブロック（φ5～20mm）密に含む。繊り・粘性有。
2. ぶい黄褐色土 10YR4/3 ロームブロック（φ2～10mm）少量含む。繊り有。粘性弱。
3. 黑褐色土 10YR3/2 ロームブロック（φ2～10mm）少量含む。繊り有。粘性弱。



第18図 SK06・09・11～16

SK 12 (第18図)

【位置】3区のJ 6グリッドに位置する。西側上端が攪乱で壊される。【形態・規模】平面は椭円形で、断面は箱形を呈する。規模は長軸1.43m、短軸1.11m、深さ50cmを測る。長軸方向はN-31°-Wを示す。【覆土】黒褐色土と暗褐色土の3層に分層される。ロームブロックを多く含む。【遺物】出土していない。【所見】検出状況や土層から土坑が重複している可能性が高い。時期は覆土の状態から中・近世と考えられる。

SK 13 (第18図)

【位置】3区のK 6グリッドに位置する。【形態・規模】平面は隅丸長方形で、断面は逆台形を呈する。規模は長軸1.18m、短軸0.73m、深さ34cmを測る。長軸方向はN-77°-Eを示す。【覆土】ロームブロックを多く含むにぶい黄褐色土の単層である。【遺物】出土していない。【所見】時期は覆土の状態から中・近世と考えられる。

SK 14 (第18図)

【位置】3区のK 7グリッドに位置する。【形態・規模】平面は隅丸長方形で、箱形を呈する。規模は長軸1.34m、短軸0.91m、深さ72cmを測る。中央に径38cm、深さ10cm程のピットがある。長軸方向はN-9°-Eを示す。【覆土】ロームブロックを多く含む暗褐色土である。【遺物】土師器壺の細片が1点出土したが、混入遺物とみられる。【所見】時期は覆土の状態から中・近世と考えられる。

SK 15 (第18図)

【位置】3区のK 7グリッドに位置する。東側が攪乱で壊されている。【形態・規模】平面は椭円形で、断面は逆台形を呈し、西側は有段になる。規模は長軸が推定で0.98m、短軸0.78cm、深さ35cmを測る。長軸方向はN-84°-Eを示す。【覆土】ロームブロックを多く含む暗褐色土である。【遺物】出土していない。【所見】時期は覆土の状態から中・近世と考えられる。

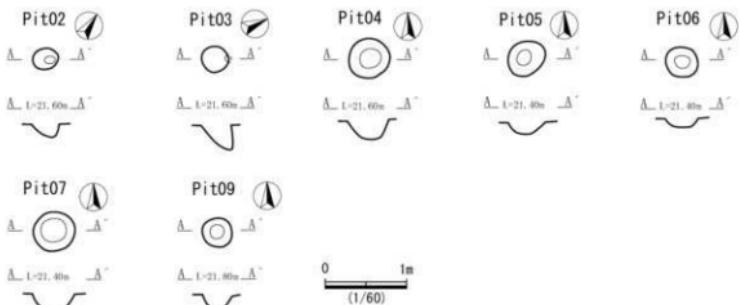
SK 16 (第18図、図版5)

【位置】3区のK 6・7、L 6・7グリッドに跨って位置する。【形態・規模】平面は椭円形で、断面は逆台形を呈する。規模は長軸1.18m、短軸0.58m、深さ35cmを測る。長軸方向はN-42°-Wを示す。【覆土】にぶい黄褐色土を主体とする3層に分層される。表面と底面直上(1・3層)にはロームブロックが多く含まれる。【遺物】土師器壺の細片が上層から1点出土したが、混入遺物とみられる。【所見】時期は覆土の状態から中・近世と考えられる。

(2) ピット

縄文時代以外のピットでは、Pit02~07・09の7基が検出されている。検出位置は全て3区からで、いずれのピットからも遺物は出土していないが、覆土の状態が中・近世の土坑に類似する点などから該期のピットと判断した。Pit02・03は確認調査で検出された遺構となっている。覆土は、ロームブロックが多く含まれた灰黄褐色土またはにぶい黄褐色土を主体とした单層である。それぞれが散在した配置状況であり、特に規則性を見出すことはできなかった。縄文時代のピットと比べて、形状がやや不整形で、規模もばらつきが目立つことから、これらの中には植栽痕なども含まれている可能性がある。

各ピットについては第19図に一括して掲載し、第8表に詳細を記した。



第19図 Pit02～07・09

第8表 中・近世ピット一覧表

遺構名	区	位置 (グリッド)	平面形	規 模(cm)			覆土・特徴・その他	出土 遺物	備 考
				長軸	短軸	深さ			
Pit02	3	K 6	円形	31	24	15	単層。10YR4/2灰黄褐色土。ロームブロック中量。	なし	トレンチ内
Pit03	3	K 6	円形	34	31	30	単層。10YR4/2灰黄褐色土。ローム粒・同ブロック少量。	なし	トレンチ内
Pit04	3	K 6	円形	52	47	25	単層。10YR4/2灰黄褐色土。ローム粒・同ブロック微量。	なし	
Pit05	3	J 6	円形	50	40	14	単層。10YR4/3にぶい黄褐色土。ロームブロック多量。	なし	
Pit06	3	J 6	楕円形	41	37	10	単層。10YR4/3にぶい黄褐色土。ロームブロック多量。	なし	
Pit07	3	J 6	円形	52	50	18	単層。10YR4/3にぶい黄褐色土。ロームブロック多量。	なし	
Pit09	3	K 6	円形	37	35	16	単層。10YR3/3暗褐色土。ローム粒微量。縦り弱。	なし	

(3) 溝跡

S D O 1 (第20図、図版5)

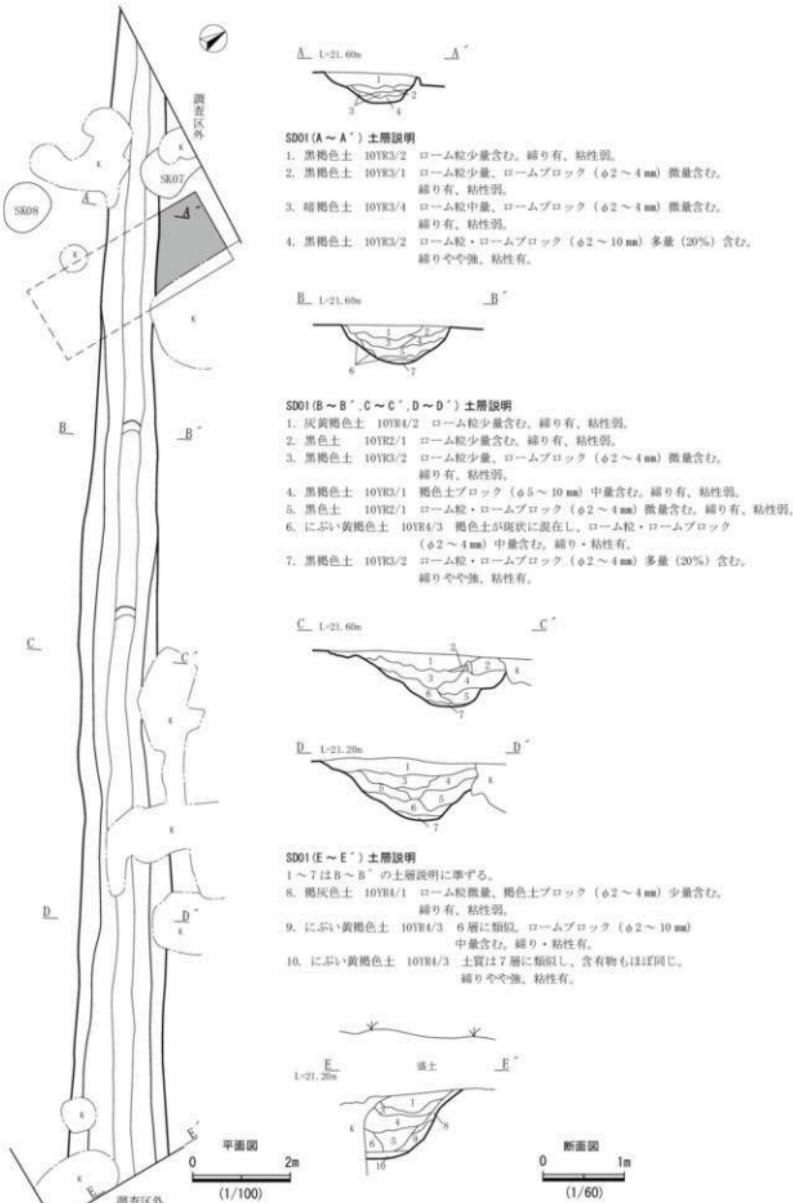
【位置】2区のH 5～I 6グリッドにかけて位置する。北西側の調査区外ではe地点のSD2に接続し、南東側は谷部へと延びている。H 5グリッド地点でSK07を切り、所々で攪乱に壊された部分がある。

【形態・規模】走行方向はN-32°-Wを示し、直線状に延びている。断面形は北西側が逆台形であるが、中央部から南東側にかけては半円状の底面からほぼ直線状に立ち上がり、上端は外側へ開く形状になっている。立ち上がりの角度は北東よりもが南西側が緩やかになっている。確認できる範囲での長さは23.00 mを測り、幅は北西端が1.10 m、南東端が2.03 mとなっている。深さは北西端が25cm、南東端が75cmと差が認められるが、これは北西側の上部が削平されているためと考えられる。さらに、底面の標高を見ていくと、北西側と南東側との比高差は約1.1 mあり、南東側の谷部に向かって下っている。北西端から南東方向7.1 mと11.3 mの地点では5～6cmのわずかな段差が認められる。

【覆土】黒褐色土を主体とした10層に分層される。上層は灰黄褐色土で粒状が粗い。

【遺物】純文土器・深鉢1点、弥生土器・壺4点、土師器・壺1点、須恵器壺1点が出土した。新旧遺物が混在しており、いずれも小破片で摩耗が顕著であることから混入遺物とみられる。

【所見】断面形状や覆土の堆積状況など、e地点・SD2にはほぼ一致している。それらの状況を踏まえ、時期は中・近世と考えられる。



第20図 SD01

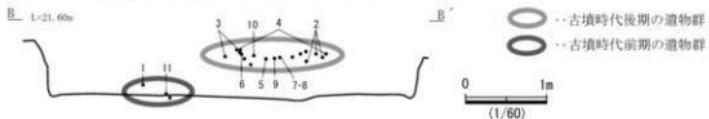
第3章　まとめ

本地点で検出された遺構の時期は、縄文時代、古墳時代、中・近世と断続的である。出土遺物には弥生時代や奈良・平安時代の土器片も出土し継続性も認められるが、本地点ではいずれも小破片が少數出土するに留まる。隣接するe地点では弥生時代や奈良・平安時代の遺構が所在していることから考えると、遺構に伴わないこれらの遺物は何らかの事由で混入したと見るのが妥当であろう。

今回の調査では、e地点において遺構が調査区外へ延びるため未調査であった部分を確認することができた。古墳時代の竪穴建物跡SI01はe地点・SI11の東隅部分にあたり、北西～南東軸の長さが把握された。e・f両地点ともに上層から弥生土器が認められるが、双方の床直上からは土師器壺の破片が出土しており、遺構形態からも古墳時代前期の竪穴建物跡であることは明らかである。同時期とみられる竪穴建物跡には新にSI02が検出されており、これでe地点のSI09を含めると合わせて3棟となった。それらが埋没谷の周辺で展開する傾向にあると理解されたことも成果のひとつとしてあげられる。中・近世の溝跡SD01は、e地点・SD2と接続し、埋没谷のある南東方向へは直線状に延びていることが把握された。さらに溝の底面には段差が設けられ、谷側に向かって一段低くすることで、緩やかな傾斜が作り出されている。利用目的としては導水・排水といった水使用の痕跡は乏しく、台地を区画したか、顕著な硬化面は認められないものの道として機能した可能性が考えられる。

成果の中で特に注目されるのは、本遺跡内にこれまでに実施してきた各地点の調査の中で、確認されていなかった遺構が検出され、さらにこれまで明確ではなかった時期の遺物がまとめて出土したことである。遺構としては縄文時代の陥し穴SK01が検出されたことである。陥し穴として明確に認識できたのはこのSK01のみであるが、土坑SK07も形態的に類似し同様の性格を持つ可能性があり、早くから狩猟の場としての土地利用が行われていたことがうかがわれる。一方、遺物としては、SI02の中で古墳時代後期の遺物が出土したことである。前章で報告したように、SI02は遺構形態からも、また下層から出土した遺物からも古墳時代前期に営まれたことは明らかであるが、その上層部分で古墳時代後期（6世紀代後半）の土師器がまとめて出土した（第21図）。出土状態から、SI02が焼失した後に廃絶され、その後は自然的に埋没していく過程で、かなり時間が経過した時点になって投棄されたことが容易に想像できる。そこで必然的にこの遺物がどこからもたらされたものなのかが気にかかるところではあるが、本地点でも古墳時代後期の遺構を確認することはできなかった。

新たに古墳時代後期の遺物がまとめて出土したことで、これまで本遺跡において空白期であった該期遺構の存在する可能性が高くなった。これは未調査区部分にはまだ確認されていない時期の遺構が埋蔵されている可能性を示唆しているものといえよう。



第21図 SI02 遺物分布断面図

【引用・参考文献】

川根正教 2000『加地区遺跡群IV』流山市埋蔵文化財調査報告 Vol.29 流山市教育委員会

高野浩之・大橋生・八千代市教育委員会 2018『麦丸宮前上遺跡e地点発掘調査報告書』日新住宅販売株式会社・八千代市教育委員会・地域文化財研究所

写 真 図 版



1区全景（南から）



2区全景（南東から）

図版 2



3区全景（北西から）



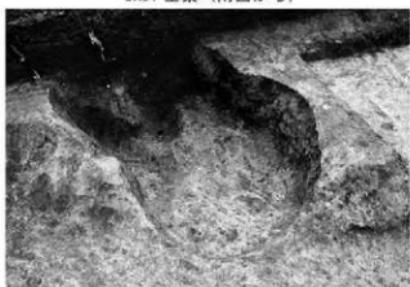
4区全景（南から）



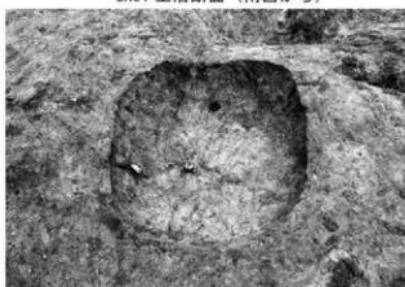
SK01 全景 (南西から)



SK01 土層断面 (南西から)



SK07 全景 (南から)



SK08 全景 (東から)



SI01 全景 (北東から)



SI01 土層断面 (東から)



SI01 遺物出土状況 (南東から)



SI01 掘り方、壁柱列 (北東から)

図版 4



SI02 全景（南から）



SI02 炉近景（南から）



SI02 完掘全景（南から）



SI02 土層断面（南東から）



SI02 上層遺物出土全景（南から）



SI02 上層遺物出土近景（南西から）



SI02 上層遺物出土近景（南から）



SI02 下層遺物出土近景（北西から）



SI02 焼土・炭化材検出全景（南から）



SI02 床上遺物出土近景（南から）



SK11 全景（東から）



SK16 全景（南東から）



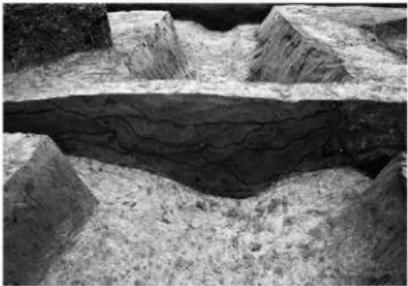
SD01 全景（南東から）



SD01 近景（北西から）

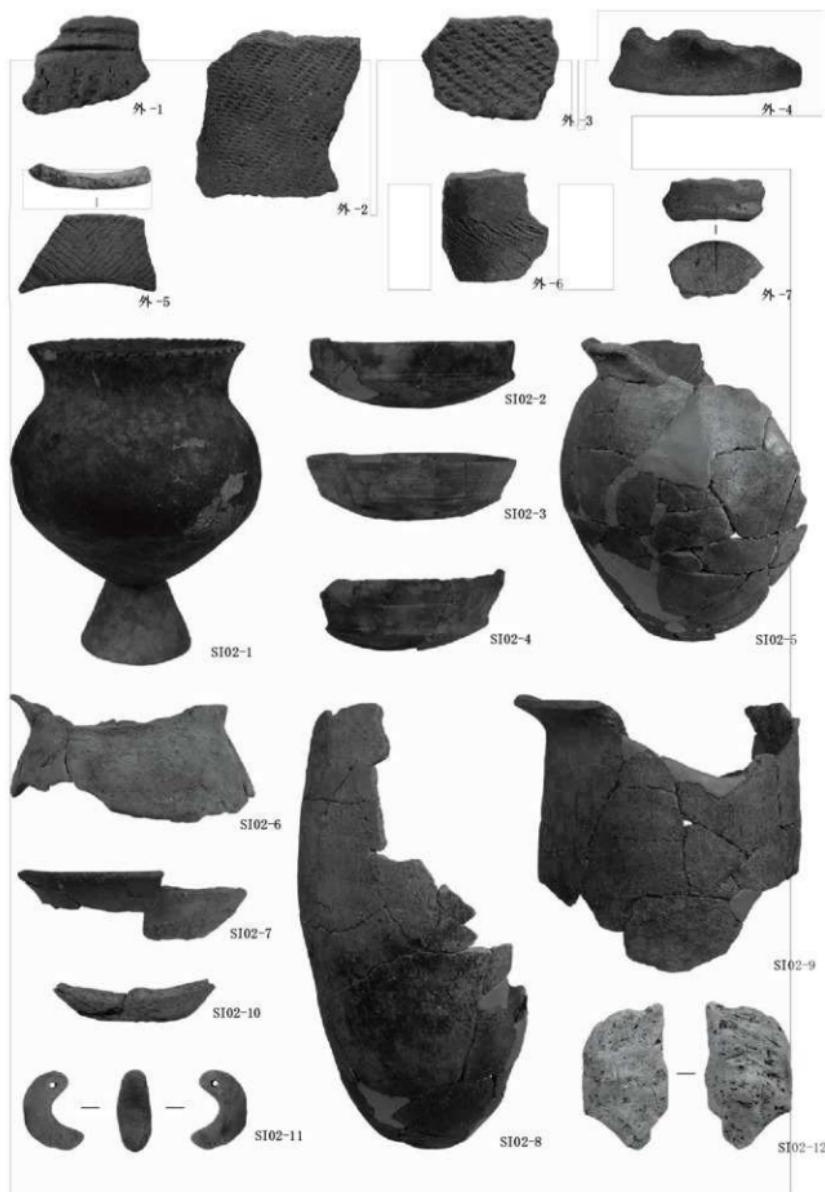


SD01 C～C' 土層断面（南東から）



SD01 D～D' 土層断面（南東から）

圖版6



遺構外出土遺物、SI02 出土遺物

報 告 書 抄 錄

千葉県八千代市
麦丸宮前上遺跡 f 地点発掘調査報告書
-宅地造成に伴う埋蔵文化財調査-

令和2(2020)年1月20日 発行

編集 株式会社 地域文化財研究所
日新住宅販売株式会社
発行 八千代市教育委員会
株式会社 地域文化財研究所

印刷 株式会社 正文社
